

# 3・11経験と、地方創生の掛け声と、その先

荒 又 重 雄

## 積み重ねた地域開発の結果

戦後日本の高度成長期以後にあった地域開発政策の結果が、新刊書の棚で見つけた『イナカ川柳』（文芸春秋社、TV Bros 編集部編、二〇一六年四月）から見えました。自虐的に過ぎる句を避けて幾つかを、以下に拾ってみました。

△チエーン店 どつちを向いても チエーン店▽（東京都・へそたいら）、△ジャスコ裏 畑・老人 地平線▽（兵庫県・田舎太郎）、△ああこれは テーマパークと いう野原▽（群馬県・キャシー）、△合併で 施設をとつたり とられたり▽（愛媛県・ICHIIMI）、△廃校を オシャレにしたがる 仕掛け人▽（山口県・イマジン）、△また来たぞ 脱サラしたての ソバ職人▽（東京都・久保田ビル）、△コンビニが 潰れたときの 終った感▽（北海道・ヤタベリユウタ）、△残ってる ビミョーナ秀才 公務員▽（東京都・続橋光太郎）、△これ以上 何がんばるの？ この過疎で！▽（群馬県・キャシー）、△傷痕が 残っただけの 町おこし▽（東京都・Diei）、△東京に 続いている気が しない空▽（和歌山県・佐々木犬助）。なかなか鋭いですね。

## 3・11以後の日本

もちろん、健気に賢く活動している地域もあるようなのです。とりわけ現在注目すべきは、見慣れた社会が背後あるいは足下に保存していた、歴史と自然の重層的な組み合わせを東日本大震災と福島原発事故という体験がわたくしたちに開示したことです。それなのに、東京の政権から発せられる「地方創生」の声には、言葉を更新し直す新しい内容がありません。遠慮ない言葉を使わせてもらえば、小さなカネをちらつかせて大資本の繁栄の後始末を地方に付けさせた従前からの策のままです。東日本の被災地からは、先手必勝と政府のカネに率先して手を挙げたら、巨大建設工事に予算が回っただけで、必ずしも住民自身に復興努力を上手に支援するものにはならなかったとか、反対に手を挙げるのは遅いが、先んじて住民の智慧を生かし得た事例があったとか、聞こえてきます。現代経済で流通しているカネでは評価しきれない、互酬制を含む歴史重層的な人間関係とか、経営の大規模化だけでは生かせない「里山」「里海」風の自然利用の智慧も、折々注目されているのです。いずれにせよ今は、住民の智慧と意欲がもっとも重要だということです。

## 9・11以後の世界

国際的にも問題は重層的になっています。英国の国民投票でEU離脱票が多数を占めて、世界に激震を走らせていますが、その是非の判断をこれまでの国際関係論から出すことは困難に見えます。国際金融資本と多国籍企業群が利益を追求してきたことから発生した社会問題を、どこの「国」で誰の責任で解決していくのが問題だからです。

EU発展史には、西欧福祉国家群の連帯を組み込む努力が「社会的ヨーロッパ」の標語の下に見られました。が、サッチャー・レーガンが世界の潮流を変えたとき、その努力は脇に追いやられました。ここでもわたくしは、遡って古いイギリス貧民法の歴史を思い出すのです。租税国家の中央政府が未だ確立していない時に、土地の私有化で掃きだされた「浮浪民」を、誰の費用負担で何処にどの様に保持し活用するのが、行政史を含めて永い貧民政策史を通ずるテーマでした。

国際金融資本と多国籍企業がグローバルに活動していて、かつ結果責任を取る世界政府を形成できないでいる事態の下で発生した難民対策なら、国民を前提にした福祉国家の政策ではなく、タックスヘイブン等に集積された国際金融資本と多国籍企業の富から目的税を徴収して、国際機関の政策として、各国の中に配置された「独立した権能」をもつ国連等の職員が施行に当たる政策が相応ではないか、と思つたのです。

△あらまた しげお・北海道大学名誉教授▽